

教会とディアスポラの人々：
どのようにして日本にディアスポラの教会を根付かせるか？

1. *Scattered to Gather*によるアスポラの定義

2010年のローザンヌ会議で配布されたブックレット*Scattered to Gather*は、宣教学的観点からディアスポラを「神の主権的支配の基に、大宣教命令を遂行し、神の国の拡大を押し進めるための、神の命令と祝福に基づく宣教の手段」と定義し、21世紀のディアスポラをグローバル化の進んだ社会における福音伝道の担い手として評価している。すなわち、神はすべての民族に福音を伝えようとしており、その伝え手として「散らされた者」達を用いられるのである。

このブックレットは聖書に登場するディアスポラに関する神学的な考察と、今日のディアスポラに関する宣教学的な提言から構成されている。神学的な観点からは、イエス・キリスト自らが神の救いの目的を達成するために地上に送られたディアスポラであり、歴史の中の様々な機会を通じて神はディアスポラを宣教の担い手として用いられたのだと言う。宣教学的な観点からは、今日のグローバル化に伴う個人や民族の移動性の増大は、新約の大宣教命令を成就するための効果的な手段となるのだと論じている。

*Scattered to Gather*はさらに、ディアスポラを単数形で用いられる場合と複数形で用いられる場合を区別し、単数形の場合は故郷を離れた個人または個々のピープル・グループのことを指し、複数形の場合は、そのような個人や様々なピープル・グループの総体を指すと言う。そして、ディアスポラの伝道にはピープル・グループ内での伝道 (Mission through the diasporas) と、異なるピープル・グループ間での懸け橋な伝道 (Missions beyond the diasporas) の二つの方向性があることを示唆している。

2. ピープル・グループをどのように取り扱うか？

C. ゴードン・オルソンによれば、ピープル・グループとは、共有する言語や宗教、民族、居住地、職業、社会階層などによってお互いに親近感を持つ比較的大きなグループを指し、福音が文化的社会的な障壁を伴わずに伝わっていくグループの単位である。このピープル・グループ内で短時間に規模の大きなキリスト教への改宗が起こることをピープル・ムーブメントと呼ぶ。¹

*Scattered to Gather*はこのピープル・グループ内での効果的な福音の伝達に期待している。そして、このピープル・グループが、グローバル化に伴い世界中に飛び散り混ざり合っていくことによって、ピープル・グループ間においても福音伝播の可能性が高まることを予測している。

しかし一口にピープル・グループと言っても、われわれが注意しなければならないのは、人々が共通の文化的背景を持ち、同じ言語を話すからと言って文化的に画一化されているとは言えないという点である。アメリカにおける日本人ディアスポラを例にとってみよう。筆者がアメリカケンタッキー州に滞在中に出会った日本人ディアスポラは、学生、駐在社員とその家族、

¹ C. Gordon Olson, *What in the World Is God Doing?* (Cedar Knolls, NJ: Global Gospel Publishers, 1994), 318.

アメリカ人と結婚した若い世代の婦人、アメリカ人と結婚した高齢の婦人という4つのグループに分けることが出来た。ひとつの都市でそれらの全てのグループに属する日本人と知り合う機会はあるのだが、彼らを集めて日本語教会を始めようとした時、彼らをひとつの会衆とすることにはかなりの困難が伴った。それは、日本という文化や言語は共通していても、彼らのライフスタイルや価値観にかなりの相違があったからである。他の牧師による他地域での経験も同様であり、ノースキャロライナで日本語教会の牧師をしていた友納靖史牧師（現在長崎バプテスト教会牧師）を訪ねた時、彼はかなり広範囲な地域にいくつもの属性の異なる日本人集会を持っていて、サーキットライダーよろしく、車でそれぞれの集会をひとつひとつ巡回しながら牧会していたのである。

グローバリゼーションが進み、世界中に様々なピープル・グループの人々が隣り合わせに住むようになって、ピープル・グループ内にはさらに下位の様々な文化的相違が存在しているので、自然に任せておくと分離していく傾向があるということを認識する必要がある。ピープル・グループ内においてもそのような傾向があるとすれば、文化を異にするエスニックグループであれば個別化の傾向はますます強くなるであろう。そしてもしそれが宗教社会学の概念で言うところの「セクト」（自分以外の文化に対して排他的なグループ）に発展してしまうと、それは、*Scattered to Gather*の言う「異なるピープル・グループ間での懸け橋な伝道」となることを困難にしてしまう。

ピーター・ベイヤーは、グローバリゼーションが進むにつれて、全ての文化が均質化していくという側面と、お互いに分離し別個のアイデンティティを持ったグループがより明確になっていくという側面が同時に進行するだろうと言っている。² 政治や経済の均質化が進み、世界がひとつになっていくかのように見えた21世紀の最初の年に、イスラム過激派による同時多発テロが発生し、それが今日まで地域紛争を引き起こしているのはその一例である。

自然に任せておけば教会はそれぞれの内部に抱える異質なグループごとに分化していく。もしキリスト教会内でそれぞれのグループが互いに無関係に発展していくならば、クリスチャンとしての集合体の持つべき伝道へのエネルギーが分散してしまうことになるだろう。そこで、異なるグループに属する人々をひとつにまとめていくための戦略が必要になってくる。

3. 日本の教会の現状

日本の教会にもグローバリゼーションの波はすでに現実となっている。海外からの帰国者クリスチャンの数は増大し、彼らをサポートするパラチャーチの働きも多様になっている。均一化という側面で見ると、日本人クリスチャンの多くは個人主義、民主主義の洗礼を十分に受けている。西洋からの帰国者クリスチャンは、そこで学んだ現代の西洋風キリスト教のエートスを自然に学んでおり、コンテンポラリーな礼拝音楽、無教派的な強調、教会籍に捉われないクリスチャン生活などを楽しんでいる。

反面日本の教会は伝統を強く保持している。Paul Tsuchido Shewは、日本の教会を「礼拝の博物館」と呼んでいる。とっくの昔になくなった西洋の礼拝様式をいまだに保持しているというのである。³ 日本の文化の根底にある、集団主義は依然として教会の中に強く根付いている。個人の信仰の表出よりも全体の和を重んじる価値観が今日においても存在している。はたしてグローバリゼーションに伴うモビリティの増加は、そのようなコミュニティを基盤とした教会像を脆弱にするのだろうか？グローバリゼーションのもうひとつの結末と照らし合わせてみる

² Peter Beyer, *Religion and Globalization*, (London: SAGE Publications, 1994), 9.

³ Paul Tsuchido Shew, "The Transformation of Christian Music in the Twentieth Century: A View from Japan" *Christianity and Culture* 22 (2006) 37.

ならば、それは薄まるどころか、ますます強まるとも考えられるのである。

グローバル化に伴う、クリスチャンの国際化、均質化は今後とも進むだろう。しかし、それと同時にコミュニティに根ざした伝統的な教会も存続し続けるであろう。帰国者が既成の教会に受け入れられない、またその中で居場所がないと感じるという感想をよく聞くが、そこには上に述べたような日本人クリスチャンの中の相対立するサブカルチャーの問題があるのである。

4. 東京バプテスト教会に見る複合文化的会衆

英語教会である東京バプテスト教会 (TBC) は日本においてユニークな教会形成をしている。東京には、多様な国々からやってきた人々が住むが、TBCの中にもそれが反映されている。2009年5月に324人の回答を得たアンケート調査では、TBCの礼拝出席者の国別の内訳は日本が49.4パーセント、次いで東南アジア17.6パーセント、北米12.0パーセント、アフリカ8.6パーセント、東アジア (中国・韓国) 5.9パーセントであったTBCのユニークな点は、国籍や文化的背景の違う人々が、それぞれのグループごとに礼拝を行うのではなく、混ざり合っているという点である。この状況は、先に見た*Scattered to Gather*が提唱している、ピープル・グループ内の伝道、またピープル・グループの枠を超えた伝道の展開を有利にしている。

北米のメガチャーチを見学すると、そこにはやはり文化的なセグレゲーションが見られることが多い。白人の教会には白人が多く集まるし、アフリカ系アメリカ人の教会にはアフリカ系アメリカ人が多く集まるという具合である。このことは、東京にある他のインターナショナル教会を見ても言えるようである。それではなぜTBCでは複合的な文化的背景を持った人々が集まり、それが維持されているのだろうか？

第1に考えられるのは、主任牧師のリーダーシップのあり方である。現在の主任牧師はデニス・フォルズ牧師であるが、前任のノーマン・ウッド牧師の時代から、西洋圏以外の人々に対する受容性がTBCの中に見られた。ノーマン・ウッド牧師は、アフリカでの活動期間が長く、サザンバプテストの宣教師として東京に赴任した後もアフリカ人に対して強い親しみを感じていた。アフリカ人の新来者があると教会全体が大喜びで迎え入れたのだという。現在のフォルズ牧師が牧会をするようになって、異文化に対する分け隔てのない態度は引き継がれている。礼拝メッセージの中でも、TBCが「51カ国の国々から集まった人々からなる教会である」ということが繰り返し語られる。⁴それは、この教会に集まる人々の教会に対するセルフイメージとして定着しているのである。TBCがパーパスドリブンを採用している事もこれに関連して重要である。それはターゲットグループが明確であるという点である。TBCのターゲットグループは、「外国人と国際化された日本人」である。メンバーシップクラスに出席した新来者はTBCが国際化された教会であるというメッセージを受け取る。単に英語を話す教会だというセルフイメージではなく、異文化と共存するのだという強い信念が教会のリーダーを通じて伝えられているのだ。また主任牧師による毎週のメッセージが特定の文化や国益に偏らないように配慮されている点も特筆しておくべきであろう。

第2に、スタッフの組織上の構造が考えられる。TBCには牧師スタッフが7名いるが、彼らの背景となる国籍も多様である。主任牧師と礼拝牧師は白人のアメリカ人であり、ユース牧師はアフリカ系アメリカ人である。副牧師は台湾出身の日本人、伝道牧師がフィリピン人、マル

⁴ 「51カ国」というのが事実を反映しているかどうかはここでは問わない。むしろこの数字が絶えず語られることによって、メンバーに対しTBCがインターナショナル教会であるという認識を深めさせる象徴的な意味付けの機能の方に注目したい。

ティサイト牧師がインド人、そして私が日本人である。TBCでは牧会スタッフそれぞれが自分の文化圏のメンバーを牧会することはない。それは一部の牧会スタッフと結びついたピープル・グループが突出するのを防いでいる。一部の文化圏に偏ることのないスタッフの配置はTBCにバランスの取れた国際性を与えている。

第3は、インフォメーションの共通化への努力である。まず英語を共通語とすることによってターゲットグループである「外国人と国際化された日本人」に同一の情報が提供される。同時に、教会全体のインフォメーションは日本語にも翻訳される。特に礼拝メッセージ、ウェブサイトの情報はいずれも2ヶ国語で発信される。それによってメンバーのほとんどは共通メッセージを受け取ることが出来る。また、時間帯を変えて数多くの礼拝が行われているが、メッセージの内容は同一で、メンバーは必ずその中のひとつに出席することが求められている。ユース向けの礼拝でクリス牧師が独自にメッセージをしていることを除けば、TBCは毎週ひとつの礼拝メッセージしか用意しない。

第4は、様々なピープル・グループによって構成されているスモールグループやミニストリーを下部構造として持っているという点である。TBCには「国際人」ばかりが集まっていると考えるのは誤りである。先のアンケートで日本人に対し、海外での居住経験を聞いたところ、41.9パーセントが「いいえ」と答えている。これは、かつてのTBCのターゲットグループであった、「国際化された日本人」が、自分達の「国際化されていない」友人や家族を教会に誘ってきたという事実、またTBCに魅力を感じた「普通の日本人」も数多く集まってきているという事実を示している。そのような国際化されているとはいえない人々をも取り込んでいる理由が下部構造の存在である。現在TBCにあるスモールグループは81であるが、その中に複数の言語で行っていると答えているものが、9つある。さらに、リーダーが自分の母国語でない言語で行っているスモールグループを加えると14になる。しかし、大半のグループはそれぞれの言語グループで集まっており、そこにそれぞれのピープル・グループが集まる場が提供されているのである。ミニストリーに関しても、異文化の人たちが共通した技能や関心によってひとつのミニストリーを形成している物も存在するが、同時にアフリカンフェロシップやフィリピンフェロシップ、ホームレスミニストリーのように、特定の共通文化を持つピープル・グループによって成り立っているミニストリーもある。それぞれのスモールグループやミニストリーが相互扶助的な機能を持ってお互いのニーズを満たしているという点も見逃すことが出来ない。

第5は、異なるピープル・グループ間の懸け橋的な役割をする人たちの存在である。TBCに多くの文化圏の人が混ざり合っている理由は何かとスタッフに問いかけた時、返って来た答えのひとつが「フィリピン人メンバーの働き」であった。TBCのメンバーの15パーセントほどがフィリピン人であるが、彼らの持ち前の文化を超えたコミュニケーション能力は特筆すべきである。さらに、二ヶ国語を話す日本人も大きな働きを果たしている。コミュニケーションを円滑にするバイリンガル人たちの働きなしに、TBCのミニストリーは十分に機能しないであろう。そしてそのような人たちに加えて、国際結婚をしたメンバーの存在が大きい。過去5年間にTBCで結婚式を挙げたカップルは34組あるが、そのうちの20組は国際結婚であった。

以上見てきたように、TBCの文化的多様性は、ピープル・グループを壊さずに下部構造の中に取り込みつつ、共通の情報伝達や礼拝への参加によってグループ全体としてのまとまりを維持することによって築かれているのである。このレポートの読者がこのような構造を理解することによって日本にディアスポラの教会を根付かせるためのヒントを得ることが出来るように願うものである。

2011年2月18日
東京バプテスト教会
渡辺 聡